

はじめに

高校・中学校での問題だと考えていた学級の荒れの問題が小学校段階まで降りてきた。それについて、この1年間いろんな視点から考えてきた。

初めは私たちも個別担任教師の対応のまずさが原因だと考えていた。しかし、日本中から聞こえてくる事実は、ことがそんな単純なものではなく、もっと深刻であること、そしてその原因が家庭や学校を超えたところにあることがわかってきた。でなければ希望に胸を膨らませて入学してきたばかりのピッカピカの1年生たちが、すぐに荒れだすはずがない。

どうした1年生

小学校の低学年の指導で苦勞しているといった話をよく耳にすることになった。すごく真面目で熱心な先生が大変な苦勞の上に病気になってしまう例も少なくない。そんな1年生の現状を紹介しよう。

1. 子どもたちが教室の中で座ってられないし、何か課題を与えたとき、それができないと、パニック状態になり、1度パニックに陥るとしばらくは戻らない。「バカヤロー」「人殺し」「いじめるな」などの言葉を叫びまくる。机をバーンと倒したり、物を投げたりと暴れまくる。そんなときでも見守るしかない、先生が押さえようとすると、なお止まらなくなってしまう。
2. パニックからパッと逃げ出したかと思うと、なんと2階の窓のところに立つ子がいて、なぜそんなことするのかと聞くと、「僕なんて、死んじゃたっていいんだ」
3. さっきまでニコニコしていたと思っていたのに、ちょっとしたトラブルでもう全然違う人になってしまう。おさまればいいが、そうじゃなくてそのまま学校を抜け出す子もいる。いくつかの学校で補教の先生が毎時間1年生につくという話や、担任1人では対応しきれなくて、保護者が廊下に見ているという話が聞かれる。
4. 水道から水をジャーと流して、あたりを水浸しにして喜んでる。
5. しょっちゅうおもらしをしてもそのままできて、自分では全然処処理ができない。
6. 教室で色塗りをしていたが、知らないうちに保健室へ抜け出して、そこで色塗りをしていた。席を外していた養護教諭が帰ってきて、具合が悪いのかと聞いてみると、ちょっと気分が悪いとは言いつつ一生懸命に色塗りをしている。よく聞いてみると、教室が暑くていやだから涼しい保健室で先生に見つからないようにしてるという。

これらの例から分かるように、とにかく今までの子どもの様子とは信じられないような状態なのだ。やっていいことと悪いこと、学級の中でどう行動すればいいのか全く分かっていない子どもたち。大人びた行動をとりつつ非常に幼いというアンバランスさを感じる。

発達のアンバランス

人間らしく育つためには大脳レベルでいうならば、知・情・意の3つがバランスよく発達していかなければならない。小学校1年生でもかなりいろいろなことを知っていて、知的レベルはかなり発達しているけれども、情動の部分や意欲の部分が、とてもないがしろにされてきているようだ。親たちも、我が子の何を大切に育てていいかわからない。朝子どもの機嫌が悪いから注意できない。暴れ出したがら親でも手がつけられないということも聞かれる。その辺にも情緒とか意志だとかの発達が深く関係しているようだ。

- ・親にこんな子どもに育てたいというビジョンがない。
 - ・モノとかお金をかけることで子育てをしてしまっている。
 - ・離婚が増えている。
 - ・虐待が増えている。
- こういう中でバランスよく子どもが育つというのは大変、

どうせ僕なんか

1年生の子ども自身が入学してきたときから、自分は駄目だと思っている「どうせ僕なんか」という言葉が1年生の口から出てくるのがすごく不思議である。「できない」「どうせだめだ」という気持ちを入学当初から持っているのである。

もうわかってもいいはずなのに…育ちそびれ

子どもたちは、入学前に友達といっぱい遊んだり、けんかをしたりする中で、友達同士のかかり方、付き合い合っていく力を付けてくるはずなのに、最近はそのことを、くぐってこない子どもが増えているようで、学級内でちょっとしたことでものすごいトラブルになる。人の物を簡単に取ってしまったり、友達の言葉に過敏に反応して、傷ついてしまったり…こういう子ども達を見て、「育ちそびれ」というか発達の未熟さを感じる。何かを学ぶにはそれにふさわしい時期がある。「遊び方」「我慢」「思いやり」知識はいつでも入るけど、これらは後からではなかなか入らない。知識や物だけを必要以上に重要視し、早期教育によって子ども達の中に育った力とは何なのか、また、そうした力と引き換えに「育ちそびれ」ている力はないのだろうかということ、ここで一度考えてみるべきなのではないだろうか。